



## 学名は結構面白い

学名は動植物の種類を表す全世界共通の名前ですが、興味がない人には、「図鑑に載っているイタリア文字のアルファベットのあれね」、くらいのものでしょうか。

しかしこの学名、知れば意外と面白いのです。今回は主に鳥類の学名についてのお話です。

■学名 binomial name または scientific name: ある生物を表す「種名」は2つの単語から成り立っています。これを「二名法」と呼び、生物分類の基礎を築いたリンネにより定められたものです。

1つめの単語は「属名」、その生物がどのグループに属しているかを示し、頭文字のみ大文字で書きます。「属名」が同じ種は近縁種ということになります。

2つ目の単語は「種小名」、その種の特徴などを表した種独自の単語で、すべて小文字表記です。また、亜種にはさらに3つ目の単語「亜種名」がつけられ、こちらもすべて小文字です。

学名は斜体字（イタリアック体）表記が基本です。

■読み方、母音“a”“e”“i”“o”“u”はローマ字と同じ、子音も“j”を「ヤ行」で読む以外はほぼ同じです。例えばゴジュウカラ *Sitta europaea* は「シッタ・エウロパエア」です。

■身近なキツツキを例に。アカゲラは *Dendrocopos major*、オオアカゲラは *Dendrocopos leucotos*、コゲラは *Dendrocopos kizuki* で、この3種は同じ「アカゲラ属」の近縁種です。（上写真アカゲラめ）

一方、クマゲラは *Dryocopus martius*、ヤマゲラは *Picus canus* で、前2種とはどちらも属が違いますが、外見からなんとなく違うグループだろうというイメージはわくでしょう。

なお、コゲラの学名については2022年1月号の「旭山野鳥メモ③コゲラ」をご参照ください。

■シマエナガはエナガ *Aegithalos caudatus* の亜種で、*Aegithalos caudatus caudatus* です。

種小名の *caudatus* は古いラテン語で「尾」、やはり特徴的な長い尾から名づけられています。



■種小名は、発見者の名前をつけたり、功績があった研究者等に捧げるものもあり、これを「献名」といいます。

世界中で日本でしか繁殖していないアオバト *Treron sieboldii* の種小名は、江戸時代に日本の動植物を研究しヨーロッパに伝えたドイツ人のシーボルトに献名されています。

■日本にちなんだ学名（種小名）がつけられる種もありますが、これには、日本だけに生息する種と、上記コゲラのように日本以外にも生息するが、最初の学術標本が日本で採取された種があります。もっとも有名なのは、トキ、*Nipponia nippon*

「ニッポニア・ニッポン」ではないでしょうか。（左写真は佐渡土産トキの置物）

■学名の話でよく取り上げられるのがミヤマホオジロ *Emberiza elegans*。種小名は「エレガンスな、優美な」という意味で、美しい黄色い羽を持つミヤマホオジロを実にうまく表しています。

ベニヒワは *Carduelis flammea*、種小名は英語の“flame”＝「炎」と語源が同じで、印象的な真っ赤な頭からつけられたものです。

■園芸の世界では、フウロソウ科のゼラニウムのように学名の「属名」で呼ばれるものもあります。

インパチェンスはツリフネソウ科で、旭山で見られるツリフネソウやキツリフネと同属です。

道内各地で野生化し旭山記念公園でも見られるルピナスも、マメ科のルピナス属の植物です。

その他、アヤメ科のフリージア、ラン科のシンビジウムなど、よく知られたものも多いです。

■きのこのエリンギは学名 *Pleurotus eryngii* の種小名がそのまま用いられていますが、これはセリ科のエリンギウム属の植物で培養される菌類であることからつけられたものです。（右はエリンギのひだのマクロ写真）

余談、日本でエリンギが広まったのは、サザンオールスターズの桑田佳祐さんがテレビで紹介したことがきっかけと言われています。

たまには図鑑の学名を見ていろいろ考えてみるのはいかがでしょうか？



## 旭山野鳥メモ 58 キレンジャク

キレンジャク Bohemian Waxwing *Bombycilla garrulus* スズメ目レンジャク科

代表的な冬鳥。東日本に多く西日本では少ない。旭川市の鳥。

北半球に広く生息している。ヒヨドリより少し小さい。

旭山ではヒレンジャクの群れに2、3羽混じっているのが毎年見られるが、キレンジャクだけの群れは移動の際に短期間見られるだけ。しかし何年かに一度キレンジャクだけの群れが2月頃まで見られることがあり、今冬もしばしば見られている。なお、キレンジャクの群れにヒレンジャクが少数混じっているのは旭山では見たことがない。

12月には西区山手通のナナカマド街路樹に300羽程が来た。

英名"Waxing"は、次列と三列の白い風切羽の先に赤い口吻物質="wax"があることによる。ヒレンジャクにはこの口吻物質はないが、同じ部分の羽が赤くなっている。

♂と♀が外見で識別できることは意外と知られていない。♂は喉の黒い部分の境がはっきりしており、♀はそこが不明瞭。ただしぱっと見では分かりにくく、写真でもはっきりと写っていないと分かりにくい(写真は♂)。

キレンジャクは「チリチリチリー」と鈴の音のような鳴き声、ヒレンジャクは「ヒー」「ヒリー」と鳴く。キレンジャクは腹部が一様に灰褐色だが、ヒレンジャクは腹部の真ん中が黄色く、尾が見えなくてもそれで識別できる。

歌舞伎役者のような顔立ちが人気だが、旭山ではなぜいたりいなかったりするのかわかり、興味はつきない。



## 2024年2月の野鳥トピックス

- シマエナガ：1月も観察機会は多くはありませんでした  
2月はイタヤカエデの樹液を飲みに来ることが予想されます
- イスカ：旭山ではほとんど見られなくなりました
- ウソ：1月後半に入り見られる頻度が落ちてきました
- マヒワ：12月以降旭山での確かな観察情報はありません
- ベニヒワ：1月中旬から旭山でも見られるようになりました
- ツグミ：1月もほとんど見られず、いても1羽でした
- ヒレンジャク：1月後半はよく見られ2月に入ってもまだいます
- キレンジャク：時々見られています(キレンジャクだけの群れも)
- クイタダキ：1月後半から観察機会が増えてきました(右写真上)
- カケス(亜種ミヤマカケス)：観察機会は多いです(右写真下)
- キバシリ：今年は観察機会が比較的多く囀りも始めました
- ミソサザイ：笹藪のある斜面で時々見られます
- クマゲラ：園内に時々やって来るとい程度の観察頻度です
- 初鳴き：ヤマガラ：1月22日 ヒガラ：1月24日



## 鶯替え(うそかえ)

全国の菅原道真公がまつられている神社では、毎年「鶯替え(うそかえ)」という神事が行われます。

今年も1月に、福岡の太宰府天満宮、大阪の大阪天満宮、東京の湯島天神、亀戸天神などで行われ、ネット等で紹介されていました。

「鶯替え」は、野鳥の「鶯=ウソ」を「嘘=うそ」に喩え、前の年の悪いことが嘘であり、それらの嘘が本年は良い事に替えられるようにと願い、木彫りの鶯「木うそ」を「替えましょう、替えましょう」の掛け声とともに新しいものに交換するという神事です。

ウソ(左写真♂)が古来親しまれてきた野鳥であることが分かります。

残念ながら北海道では「鶯替え」が行われる神社はないようですが、いつか見てみたいものです。



公式サイト

「アカゲラ通信」 第124号 2024(令和6)年2月9日発行

(公財)札幌市公園緑化協会 旭山記念公園管理事務所

<https://www.sapporo-park.or.jp/asahiya/>

〒064-0943 北海道札幌市中央区界川4丁目

電話 011-200-0311(金・土・日・祝日 10時~16時) FAX 011-200-0351